

一人ひとりの卒業式

荒 野 泰 典

「ライデン大学では一人ひとり卒業するんですよ」と、ビールだったか、ジェネーヴァのヨンゲ（若酒）だったか、赤ワインだったかを飲みながら、塚原氏から聞かされたのは、この夏、ライデンに落ち着いて間もない頃だった。塚原東吾氏は学芸大学の修士を出てすぐにライデン大学に留学し、今年三年目の夏を迎えたところで、同大学の自然史博物館に研究助手として勤務し、シーボルトが持ち帰った岩石の分析をしながら、近世の科学史で博士論文を準備している。オランダへ発つ前にいくつかの目標をたてるほかはほとんど何も準備できなかった僕は、宿泊先の斡旋から現地の研究者との面会、どこの本屋は何をおもに売っているかというような生活上のさまざまな情報などにいたるまで、彼に頼ることが多かった。

今回のオランダ訪問のおもな目的は、東インド会社関係の史・資料と文献の調査・収集だった。体調

一人ひとりの卒業式（荒野）

をくずして寝ていた一週間程をのぞけば、東インド会社関係の諸都市をまわったり、ハーグの国立文書館に通ったりしてほとんど毎日歩いていたが、その合間に塚原氏や彼の友人たち、ライデン大学の教員たち、それに留学中だったり、夏休みを利用して調査に訪れたりする日本人の研究者たちと逢い、飲み、かつ食って、さまざまなことを話した。ライデン大学の「卒業式」の話を聞いたのは、そのような機会の中の何時かだった。聞いた場所は、一七世紀に建てられかつては何かの工場だったという、旧ライン川に面した下宿屋の屋根裏にある彼の部屋だったか、彼の友人ディックの部屋の庭だったかはつきりしない。ディックの部屋は、かつて養老院で、老朽化したために今は学生の下宿になっている建物の一階にある。低い垣根で仕切られた庭の向うは市民の家の庭で、時折庭に出てくる老婦人などと夕方

の挨拶をしたり、鷗を見あげたりしながら、ビールや赤ワインを飲み、パンやチーズをかじって、十時すぎまで明るい空の下で過ごした。オランダに着いて一週間は塚原氏の下宿の一部屋に住んだが、老朽化した建物の電気の配線をどうするかで住人と大家の意見が合わず、大家が電気の配電盤を持って行ってしまったために、電気もガスも、湯も使えないという生活で、珍しく蠟燭で夜を過ごした。その日は二日ぶりにシャワーを借りて気分もさっぱりしたが、シャワー室の床に腕時計を落して壊すというおまけもついた。ライデン大学にはオランダで唯一日本・朝鮮学センターがある。ディックはその四年生で、大正デモクラシーを中心に近代日本政治史を研究しており、今は西園寺公望に関心があるという。彼は、一年半京都大学に留学していたこともあって、オランダ語のように日本語を話した。

「一人ひとりの卒業式」ということを僕はすぐには理解できなかった。塚原氏の説明を聞いてようやく理解できたのは次のようなことだった。つまり、ライデン大学では、日本の大学のような、全学いっ

せいにおこなう卒業式はない。その学生が卒業したい、あるいは卒業してもいいと考えた時に、大学にその旨を申請し、認可されたら卒業ということになる。卒業の日よりもその学生が決める。自分が決めた日にその学生は卒業試験を受け、親族や友人たちが見まもる前で卒論などの審査結果を聞き、卒業証書を受けとる。いわゆる「卒業式」に当たるものはその日の一連の儀式をおいてほかにない。

予想もしなかった話を聞かされて僕は、驚くよりも先に、大学教育のあり方やその社会的位置、さらには、教育そのものについての考え方の彼我のはなはだしい違いについて考えこんでしまった。しかしその時僕はディックの「卒業式」に参加することまでは考えなかった。

オランダ出発を一週間ほど後に控えたある日、僕は塚原氏に托されたディックからの封書を受けとった。中には、葉書ほどの大きさのベージュ色のカードがはいっていた。二つ折の表紙には、新聞記事からとった第三次桂内閣の各大臣の顔写真の上に、これも新聞の見出しの「辞表奉呈は本日」という文句があしらってあり、開くと、楕円形に切りぬいた西園寺公望らしい老人の顔が右葉のほぼ中央に据えられ、大意、次のような文が書いてあった。

まさしく！

我はもはやこの失政に堪えず。

我が偉大なる先人に倣いて、我は辞職す。

私は、一九九〇年八月三〇日木曜日一五時に、ライデンの大学記念堂において、

一人ひとりの卒業式（荒野）

ある「賢者たち」の委員会へ、卒業を申請します。私はあなたの応援を必要としています。

成績とは別に、その後一七時三〇分から一九時三〇分までの間、ロクホル通り一九番地のベルギー風カフェ・法廷で、これから進むべき方向について話し合うために私に会いに来ていただけませんか。

ディック

かなり凝った、手作りの「卒業式」への招待状だった。初めから三行目までは、おそらく新聞記事の西園寺公望の談話かなにかの引用ではないか。「我辞職す」と訳した部分は、neem ik ontslag で「卒業する」という意味もあり、第二次西園寺内閣の「辞職」と、ディック自身の「卒業」をかけている。「大学記念堂」と訳したのは、Academiegebouw で、直訳すれば「大学の建物」である。この「建物」はもともとドミニコ会の修道尼院の教会として一五一六年に建てられ、一五八一年から「大学の建物」として使われている。

イスパニアに対する独立戦争をはじめて間もないころから、オラニエ公ウィルムとその支持者たちは、若者たちがカソリック系、あるいは外国の大学に行かずにすむように、「自分たちの大学」をつくることを計画していた。ライデンの市民たちがイスパニア軍の包囲に堪えぬいて撃退したことが、戦局の転換点になったことはよく知られている。その功績に報いるために、一五七五年、ライデンに最初の大学が設立された。イスパニア軍が包囲を解いて退却した一〇月三日は、ドリー・オクトーベル drie oktober（文字通り一〇月三日）と呼ばれて、ライデン市民の祝日になっている。イスパニア軍が退却

した後に残っていた食物がジャガイモと人参で、市民たちはそれをスイートン風に料理して、とりあえず飢えをしのいだという。今でもこの日に市民たちはこの料理をつくって食べると聞いた。ライデンにかぎらず、オランダには外観はまったくゴチック風、あるいは、カソリック風なのに、プロテスタント系の教会として使われているものが多い。それらはオランダのカルヴィニストたちが独立戦争以後カソリック系の教会を接収して、自分たちの教会に転用したもので、「旧教会」と呼ばれる。中に入ってみると、簡素で手にあまるほどの大きな空間がひろがっているだけだが、それはカソリック風な装飾をできるだけ削ぎとつたためで、それでも、手の届かない部分や外観はそのままにせざるをえなかったとみて、全体の印象はちぐはぐである。「大学の建物」も、ドミニコ会から接収され、大学の施設に転用された。この「建物」それ自体に、キリスト教と、オランダという国と、ライデンという都市と、大学そのものの歴史が交錯しながら堆積している。

現在、この「建物」は大学の式典や「卒業式」に使用されている。大学博物館も、規模は小さいが、この中にある。当初はまさしく「大学の建物」だったのだろうが、大学の規模が大きくなるにつれて、現在のような「大学記念堂」風な役割だけを担うようになったのだろう。大学の諸施設のかなりの部分は「大学記念堂」の近辺にまとまっているが、残りの部分は市内に散在しており、たとえば、大学本部はライデン駅前の妙に近代的な建物である。

ともあれ、こうして、僕は、オランダを発ってイスパニアのマドリーに向かう二日前に、珍しい「卒業式」に参加させてもらえることになった。

ライデンには、他のオランダの諸都市と同じように運河が多く、さまざまな船やヨット、跳ね橋、水

一人ひとりの卒業式（荒野）

辺に建つ建物の煉瓦の壁と白や濃い緑の窓枠、尖った屋根、街路樹、教会の尖塔などとあいまって、写真や絵などで僕たちにもなじみ深い風景をつくっている。しかし、運河の水は、期待に反して、かつての墨田川ほどではないにしても、表面はくすんだ緑だが、船やボートのスクリーンがまきあげると茶色く濁る。見たところ汚染はかなり進んでいるが、オランダ人たちはそれを気にかけているようにもみえない。市民の多くが車をもつと同じかそれ以上に気軽に自家用のボートやヨットをもっていて、運河による船遊びや釣りは、盛んというよりはもっと深く彼らの日常生活と歴史に結びついている。

彼らが運河の汚染を気にかけないですんでいるのは、寒冷な気候のためだという人もいる。水が汚れ河底に汚物が沈殿しても、暖かい時期が短いために、それらが発酵してメタンガスや蚊が発生する暇がなく、生活にさほどの支障を生じなかったというのだ。しかし、今年もオランダも異常気象で、例年七・八月は雨が降り続いて肌寒いような日が多いというのに、僕がオランダに滞在していた間はよく晴れてほとんど雨も降らず、気温が三〇度を越す日が続いた。蚊に悩まされて起こされ、腹だちまぎれに蚊を追いまわすことが二夜ほども続き、もしやと思って、中国人の経営する中華用品店に行ってみると、店先に蚊取り線香 *mosquito circle* が積みあげてあった。中華用品店は、中華料理の材料など、中国人向けの日用品のほか、日本の醤油やうどん、インスタントラーメンなども売っている。早速蚊取り線香を買って帰り、それを隣の部屋に住んでいるトムにみせても、珍しそうに笑ってみただけだった。蚊も蚊取り線香も、彼らにはあまりなじみのないものであるらしかった。そういえば、十日あまりのイスパニア・ポルトガル旅行を終えてオランダのスキポール空港にもどってからは、近くのホテルに行く間もホテルの部屋にはいってからも、異様な臭いがずっと鼻についていた。その臭いがまるでドブのよ

うだと気づいたのはかなりたってからだったが、八月の末に、永積洋子先生と娘圭さんと食事をした時に、オックスフォードでの英語研修を終えてオランダにやって来たばかりの圭さんが、しきりに臭いくさいといっている先生から聞いたが、それはこの臭いだったのだと思ひあたった。異常気象は思ひがけないところから自然の循環系を崩しはじめた。

「卒業式」の当日も、午前中は曇って時折雨もパラついたが、午後から晴れあがった。午前中にオランダ滞在中に買いこんだ本を荷造りして宅急便で送り、昼過ぎに、「卒業式」後のパーティーに備えてディックへの手土産をデパートで買って、「大学記念堂」に向かった。手土産は一〇から二〇ギルダールほど（日本の実勢価格で千から二千元）と聞いたので、革の筆入れに、日本から持って行ったガチャックとガチャ玉をおまけにつけた。

「記念堂」に早く着きすぎて立っていると、ディックが女友達をともなあってあらわれ、今から筆記試験があり、式はその後だから、植物園で蛇の特別展をやっているとおもしろいのでみてきたらと勧めるので、蛇を見、ついでに各地の植民地から集められた植物の色々を見物した。時間になったのでひきかえしてみると、昨晚も塚原氏やディックと一緒に食事をした日本・朝鮮学助手のイフォ氏（日本中世文学専攻）らがぞろぞろ建物にはいって行くのに出会ったので、僕もそれに続いた。式は二階の一部屋で行われる。参加する人たちはその部屋あたりにたまって、さんざめきながらディックの筆記試験が終わるのを待っている。イフォ氏が、式場の隣の、天井が高く、壁いっぱい落書きがあつて、固そうな椅子がひとつ中央に置かれているだけの部屋が「汗の部屋」だと教えてくれる。かつては「式」を前にした学生が待機する部屋だったらしく、彼等がここで審査結果やいかにと冷や汗をかきながら座っ

一人ひとりの卒業式（荒野）

ていたので、この名前がついたという。その時イフォ氏から、「一人ひとりの卒業式」は、オランダでもライデン大学のかぎられた学部で行われているだけだとも聞いた。人口比でみても日本よりはるかに大学数のすくないオランダでも（三分の一くらいだろうか）、大学は徐々に大衆化しつつある。

オランダの大学は六年制で、卒業論文は日本の修士論文にあたるというのが従来のあり方だった。日本・朝鮮学センターで日本語教師を長く勤めてきた国森正文氏は、オランダでは今でも、大学の卒業生はその道の専門家であることを期待されており、実際、その道で就職しないで、たとえば、日本の学生がタクシーの運転手やパン屋などになった場合には、社会的には「失業」とみなされるという。日本とはまた違った厳しさがあるわけだが、オランダでは大学が高度な専門家を養成するという伝統的な役割をまだ保持しているということだろう。しかし、一方では大学の就学人口が急増しつつあり、たとえば、日本学センターは、国森氏がこの職についた十年ほど以前には学生は十人もいなかったが、現在では、一学年で百人以上入学する。これらの卒業生を「失業」させないというのはなみたいていのことではない。ここに奨学金の問題が関わる。奨学金は返済することになっているが、「失業」している間は返済を免除される。「失業」人口の増大にともなって、奨学金の赤字は増えることになり、その対策もあって、七・八年前に、従来の六年制から四年制にきりかえられた。となると、今度は専門性のレヴェルがあらためて問われることになる。オランダの大学には一般教育はないから、四年間は専門教育をうけるわけだが、学力の低下は否めない。また、六年制の時代には、卒業生を日本へ留学させる場合に修士同等の資格で送り出していたが、四年制になって、彼らの位置づけをどうするかというような実務的な問題も生じている。オランダの大学もいずれは大学卒業という資格と、就職までのモラトリアムを提

供するだけの場が変わって行くのだろうか。「一人ひとりの卒業式」がオランダの大学から姿を消すのも、そう遠くないかもしれない。

ディックが筆記試験を終えて出てきた。ややあって、ディックをはじめ「応援」の人々がひとつの部屋に入る。部屋の中央には、紺のテーブルカヴァーを掛けた大きい机がひとつ置かれ、その向うに、窓を背にして、背広にネクタイ姿の主任教授のポート氏（日本思想史）と、副査のフェルウェイエン氏（日本法制史）が座り、机のこちら側にはディックが、心もちうなだれるようにして立ち、ハンガールのような肩幅がいつもより目だつようだ。ディックは昨晚食事をした時と同じ、ダブダブの半袖のポロシャツにコットンパンツといういでたちである。「応援」の人々は二十人ばかり、部屋の入り口から壁に沿ってコの字型に展開している。ポート氏が立ちあがり、腕組みしながら演説をはじめた。「卒業式」のはじまりである。バリトンのよく通る声が部屋に響く。ディックはやや緊張気味で、「応援」の人々は神妙なおもちで、演説を聞いている。ディックは何年に一人という優秀な学生で、彼が「優等賞」を取るかどうかが友達の間で話題になっていると、塚原氏がいつていた。最近ではイフォ氏がもらったが、これも何年に一人出るかどうかというほどむずかしいものらしく、皆どのような評価がくだるか、期待しているのだ。演説なかばでポート氏がちょっと言葉を切り、ふたたび演説をはじめた所で、皆がドツ笑い、その後はポート氏をはじめ皆の表情もやわらいだ。おそらく、筆記試験の評価なのだろう、家康、家光などという聞き覚えのある単語を並べて演説を締めくくったポート氏は、ディックと握手をして、「卒業証書」を渡した。ディックがフェルウェイエン氏とも握手をして、「応援」の人々の方を向き、照れ気味に軽く会釈をした時人々からまばらな拍手が起り、「卒業式」は終わった。後で塚原

一人ひとりの卒業式（荒野）

氏に聞くと、ポート氏は「この学生に優等賞を拒否する」というところで言葉をきり、皆におやっと思わせた後で「・・・する理由はなにもない」とやたららしい。ディックはめでたく「優等賞」をもらったわけだが、ポート氏いわく、だいたいじめてやった、のだそうだ。その後ディックは「汗の部屋」に移り、誰かが準備した梯子に乗って、びっしり字の書かれた壁にわずかな隙間をみつけ、自分の名前を書き込んだ。落書きとみえたのは、歴代の卒業生の署名だった。

パーティ会場のカフェ・法廷は、「大学記念堂」の前の運河を渡って、町中へ数分歩いた所にある。といっても、会場として借りきつてあるわけではなさそうだ。パーティは、自転車でポート氏がかけた頃、それとなくはじまった。ひとしきりディックたちと話した後で、ポート氏は、家でちいさい子供が待っているの、といいながらそそくさと帰って行った。結婚するとたんに徹底して家庭中心になるのが、オランダ人の特徴でもあるらしい。その頃からてんでに手土産をもったディックの友人たちや日本・朝鮮学センターの教師たちが次々にやってきて、こどもディックに挨拶した後は、狭いカフェのあちこちに数人づつの人だまりをつくる。ビールとチーズだけの簡素なパーティだが、彼らは立ち続けたままで飲みかつ食って、にぎやかに、勢いよくしゃべっている。そのエネルギーはどこまで持続するのか、一向に先がみえなかった。この費用はディックが出すのか、両親が出すのかと、適当な所で会場を抜け出しながら塚原氏に聞くと、たぶん、ディックだろうと彼は答えた。学費にしろ、生活費にしろ、できるだけ自力で賄うのが、どうやら彼らの生き方らしい。

隣の部屋のトムは、韓国の考古学専攻が希望で、この秋からケンブリッジに留学する予定だが、万一奨学金がとれなかった場合に備えて、毎朝三時ころまでバー・大熊で皿洗いのアルバイトをして、学費

をためていた。塚原氏の下宿からトム部の部屋の隣りに越した日の翌朝、僕は電気とガスのある生活に戻れた解放感を味わいながら、口笛まじりで朝食を準備し、食後には台所の掃除もした。昼過ぎになって起きだしてきたトムは、お願いがあります、といって、朝食はなるべく静かに、掃除も朝のうちにはしないで欲しいといった。早朝までアルバイトをして帰ってきてようやく眠りについた頃に、台所で派手な音をたてられるとつらいというのだ。すこし当惑したものの、それ以後僕は、朝食はできるだけ控えめに調理し、静かに食べるようにしたが、一緒に住んでいた一か月あまりの間、トムから要求らしいものを出されたのはそれだけだった。日々のつきあいは、よそよそしくも、なれなれしくもない。隣りあって暮らしているわりには、つきあいはそっけないほどあっさりしていた。大きな音でラジオを鳴らして一人で踊っていたり、いつの間にか新しい恋人をつくっていたり、どこかの島へ泊まりがけでバードウォッチングに出かけたり、電話で友人と表情豊かに話したりしている様子をみれば、快活で健康な普通の若者なのだが、けじめはしっかりしている。昼の三時頃出て行って早朝に帰ってくるトムと、ほとんど毎日出歩いている僕とでは、重なりあう時間がほとんどなかったというところもある。僕がかなり年上のうえに大学の教師ということもあって、なにかしら遠慮があったということもあるだろう。しかし、それ以上に、おたがいの生活にはできるだけ干渉しないし、させないという生活態度が身についているように思えた。もっとも、オランダを発つ朝は、七時頃だったにもかかわらず、眠い眼をこすりながら起き出して、見送ってくれたのだった。大人ですよ、彼らは、というのが塚原氏の感想で、よくも悪しくも個人主義が徹底しており、口に出していわないかぎりには、向こうで気をまわしてなにかやってくれるということはまずないかわりに、頼めば日本人以上にきっちりやってくれるのが彼らだという。

一人ひとりの卒業式（荒野）

それは、場合によってはびっくりするほど気がきかないということにもなるが、逆に、たがいの自立性を尊重することにもつながる。

僕がオランダで暮らしながら、言葉の問題をのぞけば、風通しのよさや居心地のよさを感じたのは、日本にいればいやおうなしに背負いこむことになるさまざまなノルマから、束の間解放されたという理由だけではなかったように思う。たしかに人々は個人主義的で、それも理由のひとつなのだが、その反面で、社会全体としては、たとえば、身障者が不自由なく出歩けるような設備や心づかいがいたるところにみられるとか、僕ら異人種に対しても、すくなくとも、感じとるかぎりでは差別がない、というよりはむしろ、人はすべて平等であらねばならないという強靱な意志をもって待遇されているように感じられた。身障者を町中でも美術館でもよく見かけるし、そのためにオランダは日本より身障者が多いのかと思うほどである。採算がとれているとも思えないのに、国鉄は夜遅くまで動いており、すくなくとも、主要都市間では、本数は一時間に一本に減るものの、朝まで動いている。オランダでは、人種に拘りなく、親たちが何人か集まって学校をつくろうとすれば、政府はその費用の九五％（だったと思う）を負担することを義務づけられているという。個人主義は、それを保障する社会全体のさまざまなシステムやそのための代価を払うことと対になっているように見える。もちろん、大学生にインドネシア人やトルコ人はほとんどおらず、アムステルダム音楽堂に行くと、観客は、日本人をのぞけばほとんど白人であったり、テッセルという観光地のレストランに入ると、僕をのぞいて客はすべて白人だったというようなこともある。何よりも就職の壁が大きい。公務員に有色人種が多いことがそれを端的に物語っている。それに関しては、階層と人種はほとんど重なるのではないかとさえ思え、オランダ政府は特

に七〇年代以後増えた異人種を、保護しながら巧妙に隔離しているのだという、やや皮肉な見方もある。ただ、それらの問題も、人々に最低限の市民的な権利を保障するための代価を払った後に生じているものであり、そのバランスのとりかたが、社会全体にある種の風通しのよさを与えている。

それは、ライデンの学生たちのありようについてもいえるのではないか。ライデン滞在中に僕が出会った学生たちは、おおむね生活ぶりも、住んでいる部屋も、服装や持ち物も質素で、僕は二十年ほど前の自分の学生時代を想い出した。彼らのややバンカラな生活ぶりは、ずっと以前から続いてきた先輩たちの意匠を、あまり変えることなく、あるいはそうと意識することなくうけついでいるのだろう、何世紀もたっている下宿屋へ代々住みついでいるように。そこには大学や教師からも自立した、彼ら自身の生活の組み立て方があるように感じられた。もっとも、オランダでも七〇年代は大学紛争が激しく、その時から教師と学生がたがいにファーストネームで呼びあうようになったというから、学生たちの意匠も変わってはいる。僕がなんととはなしに彼らの生活ぶりにある親近感をもつのは、彼らが紛争世代以来の意匠を受けついでおり、そこにかつての自分に似た臭いをかぎつけるからかもしれない。

大学生活がある種のモラトリアムの時期であることでは、オランダも同じである。そのモラトリアムへの通過儀礼のひとつとして、たとえば新入生いじめがある。オランダの八・九月は新入生の季節で、この時期には、夏休みが終わって在學生が大学に戻ると、新入生とで、それまで眠っていたような町がにわかに活気づく。あちこちでバンド演奏や新入生歓迎のパーティがあり、同時に、新入生を運河に投げこんだり、長いながいビニールのトンネルをくぐらせたりというような、趣向を凝らした新入生いじめが見られる。デルフトでは、工科大学の新入生たちが、市庁舎と「新教会」の間にある町の中央広

一人ひとりの卒業式（金野）

場で、冷たい雨の中、何本ものホースで水を浴びせられながら、ひとかかえもあるボールの取りあいをさせられていた。ややてあらな、ばか騒ぎにちかい通過儀礼を通じて、新入生たちは知らず知らずのうち、モラトリアムに通過の、ある意匠を身につけていく。その意匠そのものは、外面的には、日本の大学生のものとあまり変わらないともいえる。学生の質も、入学試験などはないから、とびきり優秀な学生から、箸にも棒にもかからない学生まで、さまざまだという。しかし、彼らの学生生活の締めくくりが「一人ひとりの卒業式」であることの違いは大きく、また、重い。おそらく、卒業できない学生も多いに違いないが、それもその学生の選択と能力による、ちょうど、卒業の時期や日どりを学生自身が選べるように。もっとも、勉強したい学生には、充実した図書館をはじめ、さまざまな機会が準備されており、この点については、ライデン大学側はきちんと代価を払っている。

ともあれ、僕は、ライデン大学の「一人ひとりの卒業式」について想い出しながら、立教大学のあり方も、すこし違った角度から見なおすことができるのではないか、と考えはじめている。

（立教大学文学部教授）